

当館所蔵漢籍の「宋版」及び「元版」の解題①

土屋裕史

序

本稿は、国立公文書館（内閣文庫）が所蔵する漢籍のうち、中国の南宋時代（一一二七～一二七九）に刊行された「宋版」と元時代に刊行された「元版」（一二七九～一三六七）について、各書籍の概略・来歴・刊行年代等を一般の利用者にも分かり易く解説することを目的としたものです。

本稿では、特に各書籍の来歴に注目しました。各書籍が誰の手からどのような経緯で当館に所蔵されるに至ったかを、各書籍に捺されている蔵書印を基にして考察しました。参照した資料は以下のとおりです。

『改訂増補 内閣文庫蔵書印譜』（1981年）

『新編蔵書印譜』（日本書誌学体系79、青裳堂書店、2007年）

『蔵書印の世界』（国立国会図書館、電子展示会）

この調査によって判明した過去の所蔵者については、【伝来】の項目に取り上げ、各書籍の来歴を一覧できるようにしました。

また、刊行年代については、当館の目録である『改訂 内閣文庫漢籍分類目録』（1971年刊）を基本に置き、研究論文・研究書等を用いて、当館目録が作成されて以降の研究成果を調査しました。研究書に載せる各書籍の刊行年代を、解題に設けた【刊行年代】の項目に取り上げ、各専門家の説を一覧できるようにしました。

凡例

- 一 各書籍を取り上げる順序は『改訂 内閣文庫漢籍分類目録』（1971年刊）に基づく。
- 一 表記は新字体を基本とする。
- 一 仮名遣いは表音式によった。
- 一 【刊行年代】の項目で用いた資料は以下のとおり。

当館目録 『改訂 内閣文庫漢籍分類目録』（1971年刊）

『経籍訪古志』

渋江全善・森立之 『経籍訪古志』（解題叢書所収、国書

刊行会、1916年）

『関東現存宋元版書目』

長澤規矩也 『関東現存宋元版書目』（長澤規矩也著作集、

第三卷所収、汲古書院、1988年）

『宋元版所在目録』

阿部隆一 『宋元版所在目録』（阿部隆一遺稿集、第一巻

所収、汲古書院、1988年）

『正史宋元版の研究』

尾崎康 『正史宋元版の研究』（汲古書院、1989年）

1 周易程朱先生伝義附録 一五巻 朱子図説一卷

七冊 (元) 董楷

紅葉山文庫旧蔵「請求番号 経六八六」

『周易』は、『易経』あるいは『易』ともいわれ、本来は占いの書でしたが、儒教の重要な經典として五経(易経・書経・詩経・礼記・春秋)の一つに数えあげられています。

『周易』では、我々の住むこの世界の根源は、「陰」と「陽」の二つの気であり、この「陰」と「陽」とが、様々な配分で複雑に混ざり合うことで、森羅万象この世界すべてのものが出来上がるとしています。もし、この「陰」と「陽」の変化を筮竹(めどぎの茎で作った細い棒)を使い、「卦」という形で読み解くことができるならば、未来や吉凶を予測することはもちろん、より深遠な宇宙の根源原理さえも理解できると考えたのです。

『周易』の書物としての成立は、不明な点が多くはつきりしていません。漢の武帝が儒教を国教とした(前一三六年)頃には、『易』を教授する博士が置かれ、その後、多くの学者があらわれて、様々な『周易』解釈が行われました。現在流布する『周易』のテキストは、魏時代の王弼(二二六～二四九)が注釈を施したものが基になっています。

『周易程朱先生伝義附録』は、北宋時代の儒学者である程頤(一〇三三～一一〇七)の『易伝』と南宋時代の儒学者である朱熹(一一三〇～一一二〇)の『周易本義』とを一冊にまとめたものです。『周易』本文の後に、程頤の『易伝』、朱熹の『周易本義』の順に注釈を載せ、さらに諸々の書から程頤と朱熹の易に関する記述をまとめたものを附録とし、一目で程頤と朱熹の学説が分かる体裁になっています。序文に「咸淳丙寅」とあることから、この書は南宋時代の咸淳二年(一二六六、丙寅)に完成したこと

が分かります。

董楷(生没年未詳)は、南宋時代末から元時代初めの儒学者で、字は正叔(または正翁)、台州臨海(現在の浙江省臨海市)出身の人。朱子に学んだ陳埴(生没年未詳、字は器之)に師事して、朱熹の学問(朱子学)を学びました。董楷は、南宋時代の宝祐四年(一二五六)に科挙の試験に合格して進士となり、吏部郎中(「吏部」は人事を司る役所、「郎中」は「吏部」内にある四つの課の長)にまでなっています。

【伝来】

「秘閣ノ図書ノ之印」(甲種)の印が、毎冊首にあります。この印は、紅葉山文庫旧蔵本に明治維新後に押したもので、甲・乙・丙の三種があります。甲種の印は、明治六年皇居炎上の際に焼失しています。「日本ノ政府ノ図書」の印が、毎冊首・毎冊尾にあります。この印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用したものです。

「」の不明印が、毎冊首にあります。また、尊経閣文庫(加賀藩主前田家に伝来した書籍等を収める)に同版本があります。

【刊行年代】

序文の末に「至正己丑廬陵」「竹坪書堂新刊」の木記(出版年時、出版地、出版者等を枠などで囲って表記したもの)があることから、元時代の至正九年(一三四九、己丑)に、「廬陵」(現在の江西省吉安県)の「竹坪書堂」より刊行されたことが分かります。

元至正九年刊：当館目録、二頁。

元至正九年廬陵竹坪書堂刊本：「関東現存宋元版書目」、二二二頁。

元至正九年廬陵竹坪書堂刊：「宋元版所在目録」、一三頁。

2 周易本義啓蒙翼伝 三巻 外篇一巻

八冊 (元) 胡一桂

昌平坂学問所旧蔵「請求番号 別四六 一一」

『周易本義啓蒙翼伝』は、『周易』(前掲1 『周易程朱先生伝義附録』を参照) についての解説書で、朱熹『周易本義』の説に基づいて、初学者向けに説明を加えたものです。本書は、上巻・中巻・下巻・外篇に分かれ、その内容は以下のとおりです。

上巻：朱熹が『周易本義』の巻首に載せ、易の原理を図解した九つの図について解説する。

中巻：古代から宋・元時代までの『周易』注釈を概説する。

下巻：『周易』に関するキーワード(「理」や「気」など) について解説する。

外篇：『周易』の注釈書ではないが、『周易』に関連する文章について概説する。

胡一桂(生没年未詳) は、字は庭芳といい、宋時代の景定五年(一二六四) に郷試(官吏登用試験「科擧」で、三年に一度、各省で行う第一次試験) に合格するも、その後の試験に失敗して郷里に帰り、後進の教育に従事しました。

また、胡一桂の父親は胡方平といい、朱熹一門の流れを汲んで『周易』に精通し、『易学啓蒙通釈』を著しています。胡一桂が『周易本義啓蒙翼伝』を著述したのも、この父親からの影響が大きいようです。

【伝来】

「宝勝院」(朱印) の印が、毎冊首にあります。

この印は、京都・東福寺の塔頭である「宝勝院」の蔵書印です。ちなみ

に宮内庁書陵部蔵『東萊先生十七史詳節』には、「宝勝院」(墨印) が捺されています。

「昌平坂ノ学問所」(墨) の印が、每表紙・毎冊尾にあります。また「文政戊寅」の印があることから、本書は文政元年(一一八一、戊寅)、昌平坂学問所に収蔵されたことが分かります。

「大学ノ蔵書」、「書籍ノ館印」、「浅草文庫」の印が、毎冊首にあります。「日本ノ政府ノ図書」の印が、毎冊首・毎冊尾にあります。

このことから明治維新後は、「大学校」(明治二年～四年)、「書籍館」(明治五年～七年)、「浅草文庫」(明治七年～一四年) を経て、当館に収蔵されたことが分かります。「日本ノ政府ノ図書」の印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

また、第一冊目の冊首に「此書八冊安ノ永内申春ノ買得之河ノ内茂八每巻ノ有宝勝院ノ之印者乃前ノ人之蔵書記ノ也」と朱で書き入れがあります。この記述から本書が「安永五年(一七七六、丙申)」に「河内茂八(大阪の書店、河内屋茂八)」で購入されたものであることが分かります。

さらに本書には、江戸時代後期の儒学者である市川寛齋(一七四九～一八二〇) のものと思われる「寛齋按」で始まる書き入れがあります。前述の「安永五年」の書き入れが市川寛齋によるものとの確証はありません。ですが、時に寛齋は二八歳、もしこの書き入れが寛齋自身のものであるならば、非常に興味深いことではないでしょうか。

【刊行年代】

胡一桂の自序に「皇慶癸丑」とあります。「皇慶癸丑」は、元時代の皇慶二年(一二三三、癸丑) にあたります。

元刊：当館目録、三頁。

元槧本…『経籍訪古志』、一二頁。

「槧本」は刊本に同じ。版木を使って刷った書物。

元刊本…「関東現存宋元版書目」、二三―三二頁。

元刊…「宋元版所在目録」、一四頁。

3 周易本義啓蒙翼伝 存外篇一卷

一冊 (元) 胡二桂

昌平坂学問所旧蔵「請求番号 別四六九」

本書は『周易本義啓蒙翼伝』（前掲2）『周易本義啓蒙翼伝』を参照（の）うち、外篇一卷のみが伝わったものです。内容・作者については、前掲書を参照して下さい。

【伝来】

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、冊尾にあります。年代印はありません。

この印は、表紙と冊尾に捺するのが通例ですが、補修の際に旧表紙を取り替えたため、現在の表紙には印がありません。

「日本／政府／図書」の印が、冊首・冊尾にあります。

この印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

【刊行年代】

前掲書と同版ですが、こちらの方が刷りが良いようです。

元刊…当館目録、三頁。

元刊本…「関東現存宋元版書目」、二三―三二頁。

元刊…「宋元版所在目録」、一四頁。

4 周易新講義 一〇巻

三冊 (宋) 龔源

昌平坂学問所旧蔵「請求番号 重一六」

『周易新講義』は、『周易』（前掲1）『周易程朱先生伝義附録』を参照（に）宋時代の龔源が注釈を加えたものです。

龔源（生没年未詳）は、幼少の頃に王安石（宋時代を代表する政治家・文章家）に師事し、元豊年間（一〇七八―一〇八五）、科挙試験に合格して官僚の世界へ入ります。師である王安石が宰相となり権勢を振るうようになると、幼少の頃に師事した関係から、龔源も国子司業（政府直轄の学校や教育行政を管理した国子監の次官兼教授）となり、王安石の考えに基づく学問を教授して学者に大きな影響を与えました。しかし、王安石が失脚すると龔源も職を失い、その学問も顧みられなくなりました。そのため本書は、中国本土では散逸して残存せず、日本にのみ伝え残された書籍です。

【伝来】

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、每表紙・每冊尾にあります。また「文化乙丑」の印があることから、本書は文化二年（一八〇五、乙丑）、昌平坂学問所に収蔵されたことが分かります。

「大学校／図書／之印」「書籍／館印」「浅草文庫」「日本／政府／図書」の印が、每冊首にあります。

このことから明治維新後は、文部省の前身である「大学校」（明治二年（四年）、「書籍館」（明治五年（七年）、「浅草文庫」（明治七年（一四年）を経て、後に当館に収蔵されたことが分かります。「日本／政府／図書」の印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際

に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

本書は前述したように文化二年（一八〇五）、昌平坂学問所に収蔵されました。林家を継ぎ、第八代大学頭となった林述斎（一七六八～一八四一）は、本書を翻刻して『佚存叢書』（中国では散逸したが日本に保存されている書物を集めたもの）に収めています。この『佚存叢書』は中国に逆輸入され、中国の学者に大きな影響を与えました。

「興学ノ亭印」の朱方印が、序の巻首・巻六の巻首にあります。このことから本書は、もとは二冊本であったことが分かります。『経籍訪古志』によれば、江戸時代の学者・狩谷掖斎（一七七五～一八三五）は、この印を宋時代のものと考えています。

なお、この「興学ノ亭印」は、米沢・上杉家旧蔵『史記』（現在は、国立歴史民俗博物館蔵、国宝）にも捺されており、所有者が同一であったと考えられます。

昭和三十一年、重要文化財に指定。

【刊行年代】

宋刊：当館目録、二頁。

北宋槧本：『経籍訪古志』、一一頁。

宋紹興頃刊本：『関東現存宋元版書目』、二二二頁。

宋の紹興年間は一三三二年～一三六二年まで。

宋紹興頃刊：「宋元版所在目録」、二二二頁。

5 直音傍訓 周易句解 一〇巻

一冊 (元) 朱祖義
昌平坂学問所旧蔵「請求番号 別四六 四」

『直音傍訓 周易句解』は、『周易』（前掲1『周易程朱先生伝義附録』を参照）に元の朱祖義が注釈を加えたものです。書名の「直音」とは、あ文字の発音を同音の別字を用いて表すことです。

（例）「見は現なり」「見」は「現」と読むと「あらわす」の意味になります。

また「傍訓」とは、本文のわきに附す小文字の注をいい、本書では一句ごとに双行（二行書き）の注釈が施されています。『周易』の本文一句ごとに「直音」「傍訓」を施し、初学者にも分かり易く説明したものが、この『周易句解』です。

朱祖義（生没年未詳）は、廬陵（江西省吉安市）の人、字は子由、詳しい履歴は分からない人物ですが、『尚書』の注釈である『直音傍訓 尚書句解』を著しています。

【伝来】

「玄昌」の印が、冊首にあります。

このことから本書が、文之玄昌の蔵書であったことが分かります。文之玄昌（一五五五～一六二〇）は、安土桃山・江戸時代前期の臨濟宗東福寺派の僧侶で、詩文の才能に優れ、儒学にも造詣が深く、『四書』に訓点を施した人物として知られています。天正八年（一五八〇）、郷里である日向国（宮崎県）に戻り、学問と布教に努めました。島津家にその学識を見込まれ、多くの外交文書の作成に関与しています。

また本書の巻末には「敏徳書ノ堂新刊ノ泰定丙寅菊月印行」の木記があります。その左に「至于日本文禄三年甲午二百六十九年也」の書き入れがあります。これは、本書が出版された泰定三年（二三三六、丙寅）から、書き入れが施された文禄三年（一五九四、甲午）まで二百六十九年が経過

しているという意味で、文之玄昌によるものと考えられます。

「昌平坂／学問所」(墨)の印が、表紙・冊尾にあります。また「文化己巳」の印があることから、本書は文化六年(一八〇九、己巳)、昌平坂学問所に収蔵されたことが分かります。

「浅草文庫」の印が、冊首にあります。

「日本／政府／図書」の印が、冊首・冊尾にあります。

このことから明治維新後は、「浅草文庫」(明治七年～一四年)を経て、後に当館に収蔵されたことが分かります。「日本／政府／図書」の印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

本書には、冊首・冊尾に副紙があり、それぞれに他書からの抄録が書き入れられています。

冊首の副紙：「論九六之数」(『山堂考索』別集、卷三)

「乾坤九六之義」(『山堂考索』続集、卷三)

「弁九六陰陽進退」(『山堂考索』続集、卷三)

易の説卦伝と朱子の註、さらに潘柄・丘富国の註の抄録

(この抄録は『周易伝義大全』巻二四からの抄録)

冊尾の副紙：「論年上起月例」

「論日上起日例」

右にあげたように、冊首の副紙には、宋時代の章如愚が編纂した『山堂考索』(『群書考索』ともいう)と『周易伝義大全』からの抄録があり、冊尾の副紙には『淵海子平』等の占星術の書から抄録があります。この書き入れも文之玄昌によるものと考えられます。

【刊行年代】

巻末尾題の後に「敏徳書／堂新刊／泰定丙寅菊月印行」の木記があるこ

とから、元時代の泰定三年(一三三六、丙寅)の菊月(陰暦の九月)に、「敏徳書堂」より刊行されたことが分かります。

元泰定三刊(敏徳書堂)：当館目録、三頁。

元槧本：『経籍訪古志』、一一二頁。

元泰定三年敏徳書堂刊本：『関東現存宋元版書目』、一三三二頁。

元泰定三年敏徳書堂刊：『宋元版所在目録』、一五頁。

6 書「集伝」六巻首一卷

一冊 (宋) 蔡沈撰

昌平坂学問所旧蔵「請求番号 別四六 五」

『書』は『書経』(尚書)ともいわれ、儒教の重要な經典として五経(易

経・書経・詩経・礼記・春秋)の一つに数え上げられています。『書』と

は「書かれたもの」「記録」、また「尚書」とは「古代以来(尚)の記録」

という意味であり、『書』には伝説の聖人である堯・舜から夏・殷・周王

朝までの天子が、政治上の心構えを訓戒した詔書類や戦に臨んでの檄文

(軍隊や同志を集めるための手紙に書いた文章)などが記載されています。

『書』の本文(テキスト)には様々な問題がありますが、その最たるものは「今文」と「古文」の問題です。「今文」で書かれた『書』は、秦王

朝の博士であった伏生が伝えたテキストで、漢の時代に通用していた字体

(『今文』)である隷書で書かれたものです。「古文」で書かれた『書』は、

漢の時代にはもうすでに使われなくなった字体である科斗文字(おたまじや

くしに似た文字)古文)で書かれており、孔子の旧宅から発見されたとい

われるものです。この孔子の旧宅から発見された『書』は、残念ながら滅

んでしまいました。ところが、東晋時代の元帝（在位三一七―三二二）の時に、梅賾ばいさくという人物が「古文」で書かれた『書』が発見されたとして朝廷に献上しました。これが『偽古文尚書』といわれるもので、その後の『書』の底本となりました。しかしこの『偽古文尚書』は、今日では偽作であることが判明しています。

『書集伝』は、南宋時代の学者である蔡沈さいしんが『書』に注釈を加えたものです。蔡沈（一一六七―一二三〇）は、字は仲默、建州建陽（福建省建陽市）の人。蔡沈は朱熹の門人で、師である朱熹の遺命を受け、『書』の注釈書の作成に着手しました。序文によれば本書の完成は嘉定二年（一二二〇九、己巳）となっており、師である朱熹の死から約十年が経っていました。本書の性格は、朱熹はもちろんのこと、それ以外の先人の学説（『伝』を集め）『集伝』、平易明快に『書』を説明したところにあります。朱子学の隆盛とともに中国本土のみならず日本においても、本書は広く読まれました。

【伝来】
「昌平坂／学問所」（墨）の印が、表紙・冊尾にあります。また「文化丁丑」の印があることから、本書は文化一四年（一八一七、丁丑）、昌平坂学問所に収蔵されたことが分かります。

「大学／蔵書」「書籍／館印」「浅草文庫」の印が、冊首にあります。
「日本／政府／図書」の印が、冊首・冊尾にあります。

このことから明治維新後は、文部省の前身である「大学」（明治二年、四年）、「書籍館」（明治五年、七年）、「浅草文庫」（明治七年、一四年）を経て、後に当館に収蔵されたことが分かります。「日本／政府／図書」の印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

「義俊」（墨、白文）の不明印が、冊首にあります。

「願蓮社」（朱、白文）の不明印が、冊尾にあります。

「仰／誉」（朱、白文）の不明印が、冊尾にあります。

「社」は、浄土宗の僧侶が用いる号であり、本書が浄土宗のお寺に伝わったものであることが予想されます。しかし、残念ながら誰のものであるか現在のところは不明です。

【刊行年代】

蔡沈の序文末尾に「麻沙劉氏南／澗書堂新刊」の木記があることから、「麻沙」（福建省建陽市の地名）にある「南澗書堂」より刊行されたことが分かります。出版年時については不明です。

元刊（劉氏南澗書堂）：当館目録、六頁。

元槧麻沙本：『経籍訪古志』、一四頁。

「麻沙」とは、福建省建陽市の地名。榕樹（ガジュマル）の産地で、その木を版木に用いた出版が盛んに行われていました。

元麻沙劉氏南澗書堂刊本：「関東現存宋元版書目」、二二二頁。

元麻沙劉氏南澗書堂刊：「宋元版所在目録」、一八頁。

7 書「集伝音釈」 六巻 尚書纂図一卷

五冊（宋）蔡沈 撰（元）鄒季友 音釈

昌平坂学問所旧蔵「請求番号 別四六 六」

『書「集伝音釈」』は、蔡沈の『書集伝』六巻（前掲6『書「集伝」』を参照）に、元時代の学者である鄒季友の『尚書音釈』を合わせたものです。『尚書音釈』は、『書経』の本文と蔡沈の注釈に対して、漢字の発音と意義

（＝「音釈」）を加えたもので、もともとは単独で出版された書物（＝「単行本」）であった。

鄒季友は、字は晋昭、鄒陽（現在の江西省鄒陽県）出身の人。詳しい履歴は分かりません。

【伝来】

「蟬氏ノ蔵書」の印が、毎巻首にあります。

このことから本書が、蟹養齋の蔵書であったことが分かります。蟹養齋（一七〇五～一七七八）は、江戸時代中期の崎門学派（山崎闇齋を祖とする学派）の儒学者で、名は維安、字は予定、号は養齋といひます。二十一歳の時に京都に出て、山崎闇齋の高弟である三宅尚齋の下で学び、朱子学を正統とする山崎闇齋の学問を継承した人物です。

「昌平坂ノ学問所」（墨）の印が、每表紙・每冊尾にあります。また「享和辛酉」の印があることから、本書は享和元年（一八〇一、辛酉）、昌平坂学問所に収蔵されたことが分かります。

「大学ノ蔵書」「書籍ノ館印」「浅草文庫」の印が、毎冊首にあります。「日本ノ政府ノ図書」の印が、毎冊首・每冊尾にあります。

このことから明治維新後は、文部省の前身である「大学」（明治二年、四年）、「書籍館」（明治五年～七年）、「浅草文庫」（明治七年～一四年）を経て、後に当館に収蔵されたことが分かります。「日本ノ政府ノ図書」の印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

また数箇所の巻尾に、「浄書捨入」の墨書があります。

【刊行年代】

「双桂書堂」とある封面（本文の前に添える頁）が表紙裏に貼付され、また凡例の後に「至正辛卯孟夏ノ徳星書堂重刊」の木記があることから、

元時代の至正一一年（一三五二、辛卯）に「徳星書堂」より刊行されたことが分かります。いつ「双桂書堂」で刊行されたかは不明ですので、版本の前後関係は分かっています。

元至正一一年刊（徳星書堂）…当館目録、七頁。

元槧本…『経籍訪古志』、一四頁。

元至正一一年徳星書堂刊本…「関東現存宋元版書目」、一三三頁。

元至正一一年徳星書堂刊…「宋元版所在目録」、一八頁。

8 尚書纂図（書集伝音釈附録本）

一冊 編著者未詳

毛利高標旧蔵「請求番号 別六一七」

尚書纂図^{しやうじゆざんず}は、書「集伝音釈」（前掲7を参照）の附録部分だけが残ったものです。「纂図」とは「図版」を「編纂する」という意味で、本書は中国古代王朝の系譜図・曆図・儀礼に使用する器物の図などを一卷にまとめたものです。編著者については未詳です。

【伝来】

「佐伯侯毛利ノ高標字培松ノ蔵書画之印」の大型印が、冊首にあります。

このことから本書が、豊後佐伯藩（現在の大分県佐伯市にあった二万石の小藩）の藩主であった毛利高標の旧蔵書であることが分かります。毛利高標（一七五五～一八〇二）は、字を培松、堂号を紅葉齋といい、江戸中期の代表的な蔵書家です。高標は学問を好み、宋・元・明版や朝鮮本を主とする約四万冊の漢籍を収集し、佐伯城内に佐伯文庫を建てて、その蔵書を管理させました。

文政十一（一八二八）年、高標の孫である高翰たかなかによって、文庫本中の善本二万冊余りが幕府に献上されました。この献上本は、紅葉山文庫・昌平坂学問所・医学館に分収されましたが、現在、その大部分が当館に所蔵されています。

「昌平坂／学問所」（墨）の印が、表紙・冊尾にあります。年代印はありません。このことから本書は文政十一年に毛利家から幕府に献上された後、昌平坂学問所に収蔵されたものであることが分かります。

「日本／政府／図書」の印が、冊首にあります。

「内閣／文庫」の印が、冊首・冊尾にあります。

「日本／政府／図書」の印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。「内閣文庫」の印は昭和八年から使用されています。

【刊行年代】

元刊（書集伝音釈附録本）：当館目録、七頁。

元刊本：「関東現存宋元版書目」、一三三二頁。

元刊：「宋元版所在目録」、一八頁。

9 書「集伝纂疏」 六巻

六冊（元）陳櫟 撰

市橋長昭旧蔵「請求番号 別四六 一三」

『書「集伝纂疏」』は、蔡沈さいしんの『書集伝』六巻（前掲6『書「集伝」』を参照）に、宋代末から元時代初めの学者である陳櫟ちんれきが諸説を集めて補足を加えたものです。

陳櫟ちんれき（一二五二～一三三四）は、字は寿翁、号は定宇先生、休寧きゆうねい（安徽省休寧県）出身の人。宋王朝が滅亡すると、隠居して著述に専念し、朱子学の発展に寄与しました。

【伝来】

「仁正侯長昭／黄雪書屋鑿／蔵図書之印」の大型印が、毎冊首にあります。このことから本書が、仁正寺藩にしよじ（現在の滋賀県蒲生郡日野町西大路にあつた一万八千石の小藩）の藩主であつた市橋長昭いちはしながあきの旧蔵書であることが分かります。市橋長昭（一七七三～一八一四）は、毛利高標（前掲8『尚書纂図』を参照）と並び称された蔵書家です。長昭は、書誌字に造詣が深く、宋版・元版の書籍を数多く所蔵していました。

文化五年（一八〇八）、長昭は宋版・元版三〇部（その内の数部が明版）を湯島聖堂に献納しました。これらの献書には、その最終冊末に市橋長昭の献書跋文が綴じ合われています。この跋文は「長昭謹誌」の形をとっています。文章は長昭と親交のあつた佐藤一斎（江戸後期を代表する儒学者）が作成し、書は市河米庵（江戸後期を代表する能書家）の手によるものです。市橋長昭の献書については、三〇部のうちの二一部が当館に所蔵されており、本書はその一部です。

「昌平坂／学問所」（朱）の印が、每表紙・毎冊尾にあります。この朱印は、大名や学者から湯島聖堂に献納された書物にのみに捺される特別なもので、同じ印文の墨印を捺した普通書と区別し、一般の学生の閲覧を禁じて大切に保管されました。この印からも、本書が文化五年（一八〇八）に市橋長昭から献納されたものであることが分かります。

「浅草文庫」の印が、毎冊首にあります。

このことから明治維新後は、「浅草文庫」（明治七年～一四年）を経て、当館に収蔵されることが分かります。

「養」(朱、白文)の不明印(小印)が、每冊尾にあります。

【刊行年代】

序文末尾に「泰定丁卯陽月／梅溪書院新刊」の木記があることから、元時代の泰定四年(一三二七、丁卯)の陰曆一〇月に「梅溪書院」より刊行されたことが分かります。

元泰定四年(梅溪書院)……当館目録、七頁。

元槧本……『経籍訪古志』、一四頁。

元泰定四年梅溪書院刊本……『関東現存宋元版書目』、一三三三頁。

元泰定四年梅溪書院刊(明初修)……『宋元版所在目録』、一八頁。

10 尚書通考 一〇巻

四冊 (元)黄鎮成 撰

市橋長昭旧蔵「請求番号 別四七三」

尚書通考^{しょうしょつこう} は、『書経』に記載されている文物・天文・音楽などについて、元時代の学者である黄鎮成^{わうちんせい}が絵図などを用いながら解説を加えたものです。

黄鎮成^{わうちんせい}(一二八八～一三六二)は、字は元鎮、号は紫雲山人、邵武^{しやうぶ}(福建省邵武市)出身の人。聖賢の学(儒学)を学び、晩年に江南儒学提挙(江南地方の学校を管理する職)に推薦されましたが、その職に就くことなく亡くなりました。

【伝来】

「仁正侯長昭／黄雪書屋鑿／蔵図書之印」の大型印が、第一冊目の冊首にあります。

昌平坂／学問所(朱)の印が、每表紙・每冊首(二冊目以降)・每冊尾にあります。

この二つのことから本書が、『書「集伝纂疏」』(前掲書9)と同様、仁正寺藩主・市橋長昭より湯島聖堂に献納された宋版・元版三〇部のうちの一部であることが分かります。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあります。

「日本ノ政府ノ図書」の印が、每冊首・每冊尾にあります。

このことから明治維新後は、「浅草文庫」(明治七年～一四年)を経て、当館に収蔵されたことが分かります。「日本ノ政府ノ図書」の印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

【刊行年代】

元刊：当館目録、七頁。

元槧本……『経籍訪古志』、一五頁。

元至正刊本……『関東現存宋元版書目』、一三三三頁。

「元至正七年」跋刊……『宋元版所在目録』、一九頁。

11 書蔡氏伝旁通 六巻

四冊 (元)陳師凱 撰

市橋長昭旧蔵「請求番号 別四六一二」

書蔡氏伝旁通^{しよさいしでんぼうつう} は、蔡沈^{さいしん}の『書集伝』六巻(前掲6)『書「集伝」』を参照^{しょう}に、元時代の学者である陳師凱^{ちんしがい}が解説を加えたものです。蔡沈の『書集伝』は、『書経』の本文に登場する名物(鳥獸虫魚や器物類など)につ

いて、あまり説明をしていません。本書はその欠点を補うべく、名物について詳しく解説しています。また本書は、『書経』の本文、及び蔡沈の注釈は載せず、陳師凱の解説のみを載せています。

陳師凱(生没年未詳)は、字は道勇、南康(江西省南康市)出身の人。元王朝に仕えず、廬山(江西省九江市にある名山)に隠棲して弟子の教育と著述に専心しました。

【伝来】

「仁正侯長昭ノ黄雪書屋鑿ノ蔵図書之印」の大型印が、第一冊目の冊首にあります。

「昌平坂ノ学問所」(朱)の印が、每表紙・每冊首(二冊目を除く)・每冊尾にあります。

この二つのことから本書が、『書「集伝纂疏」』(前掲書9)と同様、仁正寺藩主・市橋長昭より湯島聖堂に献納された未版・元版三〇部のうちの一部であることが分かります。

「浅草文庫」の印が、每冊首にあります。

「日本ノ政府ノ図書」の印が、每冊首・每冊尾にあります。

このことから明治維新後は、『浅草文庫』(明治七年〜十四年)を経て、当館に収蔵されたことが分かります。「日本ノ政府ノ図書」の印は、明治九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

【刊行年代】

第四冊目の冊尾に「至正乙酉四月ノ余氏勤有堂印行」の刊記があることから、元時代の至正五年(一三四五、乙酉)の陰暦四月に、「勤有堂」より刊行されたことが分かります。

元至正五刊(余氏勤有堂)…当館目録、七頁。

元槧本…『経籍訪古志』、一五頁。

「槧本」は刊本と同じ。版木を使って刷った書物。

元至正五年余氏勤有堂刊本…『関東現存宋元版書目』、一三三頁。

元至正五年余氏勤有堂刊…『宋元版所在目録』、一九頁。

12 附釈音 周礼註疏 四二巻

二〇冊 (漢)鄭玄注 (唐)賈公彦疏

(唐)陸徳明 釈文

紅葉山文庫旧蔵「請求番号 経九五 三」

『周礼』とは、『周官』ともいわれ、儒教の重要な經典の一つです。周公旦(周王朝の創立に貢献した人物)の作ともいわれていますが、作者は未詳です。本書は、周王朝に置かれた官職の職分について述べたものといわれています。官職が天官・地官・春官・夏官・秋官・冬官の六官(一つの官ごとに六〇の官職を配当)に分類され、合計三六〇の官職についての職分が説明されています。

附釈音 周礼註疏は、鄭玄の「註」に基づいて賈公彦が「疏」(注にさらに注を付したもの)を施したものに、補足として陸徳明の「經典釈文」からの引用を附したものです。

鄭玄(一二七〜二〇〇)は、後漢時代の学者で、字は康成、高密(山東省高密市)出身の人。儒教の經典である五經(易經・書経・詩経・礼記・春秋)に通曉し、多くの經典に注釈を施し、後世の学者に多大な影響を与えました。

賈公彦(生没年未詳)は、唐時代初期の学者で、永年(河北省永年県)

出身の人。唐の高宗（在位六四九～六八三）の命を受け、孔穎達の『五經正義』を補足する形で、『周礼』と『儀礼』に「疏」を施しました。

陸徳明（五五六～六二七）は、陳・隋・唐の王朝に仕えた学者で、名は元朗、字は徳明、呉興（江蘇省蘇州市）出身の人。経書（儒教の經典）や老莊思想の書（『老子』や『莊子』など）の文字の異同や発音を、六朝（魏・晋・南北朝）時代の資料によって考証した『經典釈文』を著しました。

【伝来】

「秘閣ノ図書ノ之印」（甲種）の印が、毎冊首にあります。

この印は、紅葉山文庫旧蔵本に明治維新後に捺したもので、甲・乙・丙の三種があります。甲種の印は、明治六年皇居炎上の際に焼失しています。

「日本ノ政府ノ図書」の印が、毎冊首・毎冊尾にあります。

この印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

本書は、紅葉山文庫に秘蔵されていたものであり、書き入れなど一切なく、保存状態は極めて良好です。

【刊行年代】

元刊（明正徳修）…当館目録、一二頁。

元刊明正徳修本…「関東現存宋元版書目」、二二三頁。

元刊明正徳修…「宋元版所在目録」、二四頁。

13 儀礼図 一七卷（旁通図欠）

二〇冊（宋）楊復

昌平坂学問所旧蔵「請求番号 別六一四」

『儀礼』は儒教の經典の一つで、『周礼』・『礼記』とあわせて「三礼」といわれています。『儀礼』は、周時代の士大夫が執り行った冠婚葬祭などの儀式の次第を克明に記録したものです。

『儀礼図』は、書名に「図」とあるように、儀式における器物の配列や人物の立ち位置などを図によって明示したものです。本文は、経文・注・図の順に並べられており、その注は簡潔で読みやすいものになっています。

楊復（？～一一三六）は、福安（福建省福安市）出身の人で、字は志仁、信齋先生と称されています。楊復は朱熹の弟子で、『儀礼図』のほかにも『祭礼』、『家礼雑説附注』などの著作があります。

【伝来】

「昌平坂ノ学問所」（墨）の印が、每表紙・毎冊尾にあります。年代印はありません。

「大学ノ蔵書」、「書籍ノ館印」、「浅草文庫」の印が、毎冊首にあります。

「日本ノ政府ノ図書」の印が、毎冊首・毎冊尾にあります。

このことから明治維新後は、「大学校」（明治二年～四年）、「書籍館」（明治五年～七年）、「浅草文庫」（明治七年～一四年）を経て、当館に収蔵されたことが分かります。「日本ノ政府ノ図書」の印は、明治一九年二月

に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

【刊行年代】

元刊（明嘉靖修）…当館目録、一三頁。

元時代に作られた版木を用い、破損の酷いものについては嘉靖年間（一五二一～一五六六）に補刻（版木を作り直）したものをを用いて刷った書物。

宋槧本…『経籍訪古志』、一八頁。

刻工名の研究により宋版ではないことが分かっています。

元刊明嘉靖修本：「関東現存宋元版書目」、二二三頁。

元昭武謝子祥刊明正徳修：「宋元版所在目録」、二二五頁。

本書は、陳普の序文より、昭武（福建省昭武市）の謝子祥が楊復の儀礼図及び傍図と儀礼の経文とを併せて刊行したものであることがわかります。

14 校正詳増音訓 礼記句解 一六卷

七冊（宋）朱申

毛利高標旧蔵「請求番号 経九五 一」

『礼記』は、儒教の重要な經典として五經（易経・書経・詩経・礼記・春秋）の一つに数えあげられています。また『儀礼』・『周礼』とあわせて「三礼」ともいわれます。『礼記』は、その名が示すように「礼」の「記」、すなわち「礼」に関する注釈あるいはノートの意味です。その内容は、雑多で多方面にわたり、法律や制度、日常の礼儀作法などについて述べたものになっています。

『校正詳増音訓 礼記句解』は、「句解」とあるように『礼記』の本文の一句ごとに、南宋時代の学者である朱申が注釈を加えたものです。

朱申は、詳しい事跡は分からない人物ですが、他に『周礼句解』一二巻、『春秋左伝句解』三五巻の注釈書を著しています。

【伝来】

「佐伯侯毛利／高標字培松／蔵書画之印」の大型印が、第一冊目の冊首にあります。このことから本書が、豊後佐伯藩（現在の大分県佐伯市にあった二万石の小藩）の藩主であった毛利高標（前掲8『尚書纂図』を参照）の旧蔵書であることがわかります。この蔵書中の善本二万冊余りが、文政

十一（一八二八）年に高標の孫である高翰（たかなか）によって幕府に献上され、紅葉山文庫・昌平坂学問所・医学館に分収されました。

「秘閣／図書／之印」（甲種）の印が、毎冊首にあります。

このことから文政十一年に毛利家から幕府に献上された後、紅葉山文庫に収蔵されたものであることがわかります。

「日本／政府／図書」の印が、毎冊首・毎冊尾にあります。

この印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

「文庫」（は切り取られている）の印が、巻一、巻六、巻一一の巻首に捺されています。本書は、毛利家が幕府に献上した書籍の目録である『佐伯献書目』では三冊となっています。現在は七冊本ですが、本来は三冊本であり、その毎冊首にこの印があったと考えられます。

【刊行年代】

元刊：当館目録、一三頁。

元刊本：「関東現存宋元版書目」、一三四頁。

元刊：「宋元版所在目録」、二九頁。

15 礼記「集説」 一六卷

六冊（元）陳澧

昌平坂学問所「請求番号 別四六 八」

『礼記「集説」』は、『礼記』（前掲14『礼記句解』を参照）に、宋時代末から元時代初めの学者である陳澧が解釈を加えたもので、朱熹の学説を基本におき、その他の学者の説を援用して『礼記』の本文を説明しています。本書は、一四一五年に明の成祖によって『五経大全』（朱子学に基づく五

經の注釈書)が勅撰された際、『礼記』の注釈書として採用された。

陳澧(一三二一〜一三四一)は、字は可大、都昌(江西省都昌縣)出身の人。号は雲莊、北山、経師先生。朱熹一門の流れを汲む学者で、宋時代の混乱期に隠棲し、郷里で学問を教授しました。

【伝来】

「昌平坂ノ学問所」(墨)の印が、每表紙・每冊尾にあります。また「天保丁酉」の印があることから、本書は天保八年(一八三七、丁酉)、昌平坂学問所に収蔵されたことが分かります。

「大学ノ蔵書」、「書籍ノ館印」、「浅草文庫」の印が、每冊首にあります。「日本ノ政府ノ図書」の印が、每冊首・每冊尾にあります。

このことから明治維新後は、「大学校」(明治二年〜四年)、「書籍館」(明治五年〜七年)、「浅草文庫」(明治七年〜一四年)を経て、当館に収蔵されたことが分かります。「日本ノ政府ノ図書」の印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

「宜室」(朱、白文)の印が、一冊目の凡例、二冊目の巻三と巻五、三冊目の巻七、四冊目の巻九と巻一一、五冊目の巻一三、六冊目の巻一五、合計八か所に捺されています。本書は現在六冊本ですが、本来は八冊本であり、その每冊首にこの印が捺されていたと考えられます。

【刊行年代】

第一冊目、巻一の巻末に「天曆戊辰建安ノ鄭明德宅新刊」の木記があることから、元時代の天曆元年(一三三八、戊辰)に、建安(福建省建甌市)の鄭明德なる人物によって刊行されたことが分かります。

元天曆元年(鄭明德)……当館目録、一三頁。

元天曆元年鄭明德宅刊本……「関東現存宋元版書目」、一三四頁。

元天曆元年鄭明德宅刊……「宋元版所在目録」、二九頁。

16 春秋経左氏伝句解 七〇巻

七冊 (宋) 林堯叟

紅葉山文庫旧蔵「請求番号 経七一五」

『春秋』は、儒教の重要な經典として五經(易経・書経・詩経・礼記・春秋)の一つに数えあげられています。『春秋』とは、もともと周王朝の諸侯の一つである「魯」の国の歴史書で、隠公から哀公までの一二公、約二四〇年間の出来事を編年体にとめたものです。この「魯」の国の歴史書に、孔子が筆削を加えたということで、『春秋』は五經の一つになりました。この『春秋』には、「三伝」といわれる「左氏伝」「公羊伝」「穀梁伝」の注釈書があります。左氏は左丘明、公羊は公羊高、穀梁は穀梁赤のことで、それぞれの注釈の作者といわれる人物の名です。

『春秋経左氏伝句解』は、『春秋』の本文、「左氏伝」の本文の句ごとに、宋時代の学者である林堯叟が注釈を加えたものです。

林堯叟(生没年未詳)は、唐翁という字のみが分かるだけで、その他の事跡は分かりません。

【伝来】

「秘閣ノ図書ノ之印」(甲種)の印が、每冊首にあります。

この印は、紅葉山文庫旧蔵本に明治維新後に捺したもので、甲・乙・丙の三種があります。甲種の印は、明治六年皇居炎上の際に焼失しています。「日本ノ政府ノ図書」の印が、每冊首・每冊尾にあります。

この印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用したものです。

本書は、紅葉山文庫に秘蔵されていたものであり、書き入れなど一切なく、保存状態は極めて良好です。

【刊行年代】

元刊：当館目録、一九頁。

元刊本：「関東現存宋元版書目」、一三五頁。

元刊：「宋元版所在目録」、三四頁。

17 明本排字 九經直音 二卷

二冊 (唐 陸徳明)

清原家・市橋長昭旧蔵「請求番号 別五〇 二二

『明本排字 九經直音』は、儒学で重視されている九つの經典に記載されている漢字について、直音(同音の漢字を使って難解な漢字の発音を示す方法、前掲5『直音傍訓周易句解』を参照)などを用いて注釈を加えたものです。本書で扱われている九つの經典は、以下のとおりです。

上巻：『孝經』『論語』『孟子』『毛詩』『尚書』『周易』

下巻：『礼記』『周礼』『春秋』

著者については、当館目録では唐時代の陸徳明(前掲12『周礼註疏』を参照)ということになっています。これは、本書第一冊目の扉(もと封面)に「明本排字」「九經直音」と大書し、この行間に「陸徳明音義」とあることに基づきます。しかしながら、本書の内容を確認しますと、陸徳明が生きた唐時代よりも後の学説、特に宋時代の学説が多く用いられており、本書の作者が陸徳明ではないことが明らかです。したがって、「著者不明」とするのが妥当と考えられます。

【伝来】

「国ノ賢」の印が、第一冊目の表紙にあります。

「天師明経儒」の印が、毎冊首にあります。

この「国ノ賢」の印は、清原国賢の蔵書印であり、また「天師明経儒」の印は、明経博士家である清原家の蔵書印です。清原国賢(一五四四～一六一四)は、安土桃山・江戸時代初期の清原家の当主です。清原家は平安

以来、儒学を専門とする明経道の博士を世襲した家柄です。国賢の子である秀賢の代となって清原家を船橋家と改称し、この船橋家は以後明治時代まで続きました。本書は、この二つの印より清原国賢等清原家の旧蔵書であることが分かります。

「仁正侯長昭ノ黄雪書屋鑒ノ蔵図書之印」の大型印が、毎冊首にあります。

「昌平坂ノ学問所」(朱)の印が、每表紙・第一冊目の冊首・毎冊尾にあります。

この二つのことから本書が、『書「集伝纂疏」』(前掲書9)と同様、仁正寺藩主・市橋長昭より湯島聖堂に献納された宋版・元版三〇部のうちの一部であることが分かります。

「浅草文庫」、「日本ノ政府ノ図書」の印が、毎冊首にあります。

「内閣ノ文庫」の印が、毎冊首・毎冊尾にあります。

このことから明治維新後は、「浅草文庫」(明治七年～一四年)を経て、当館に収蔵されたことが分かります。「日本ノ政府ノ図書」の印は、明治九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。「内閣ノ文庫」の印は昭和八年から使用されています。

不明印(朱で塗り潰され判読不能)が、毎冊首にあります。

「ノノ」の不明印二つが、第二冊目の冊尾にあります。

【刊行年代】

第二冊目の冊尾に「至正ノ丁酉（鐘型）、「日新書堂」、「綉梓」（鼎型）の木記があることから、元時代の至正一七年（一三五七、丁酉）に、「日新書堂」より刊行されたことが分かります。

元至正一七刊（日新書堂）…当館目録、二八頁。

元槧本…『経籍訪古志』、四四頁。

元至正十七年日新書堂刊本…『関東現存宋元版書目』、一三三頁。

元至正一七年日新書堂刊…『宋元版所在目録』、四七頁。

18 論語通 一〇巻

五冊（元）胡炳文

吉田意庵・昌平坂学問所旧蔵「請求番号 別四八 一」

『論語通』は、『四書通』のうち『論語』の部分のみが伝わったものです。

『四書通』は、朱熹の『四書集註』（20『四書集註』を参照）に、元時代の学者である胡炳文が補足説明を加えたものです。胡炳文は、趙順孫『四書纂疏』と呉真子『四書集成』（19『孟子集成』を参照）を基にして、朱熹の学説に合致するものを取捨選択し、説明が足りない場合は「通曰」以下に自説を述べています。

胡炳文（一二五〇～一三三三）は、字は仲虎、雲峯先生と呼ばれた元時代の学者です。父親の胡斗元も同じく学者で、胡炳文は父親の学問を受け継ぎ、郷里において朱子学の講学と研究に専心しました。元の仁宗の延祐年間（一三二四～一三三〇）に、官職に就くよう推挙を受けましたが、とうとう仕えることはありませんでした。

【伝来】

「吉家氏蔵」（あるいは「吉氏家蔵」）の印（白文）が、第一冊目の冊首にあります。このことから、本書が吉田意庵の旧蔵であることが分かります。吉田意庵とは、戦国時代の医師である吉田宗桂（一五二一～一五七二）の通称で、息子の宗恂（一五五八～一六一〇）が受け継いでより吉田家歴代の号となりました。この印も吉田家累代が用いたものと考えられています。

「昌平坂ノ学問所」（墨）の印が、每表紙・每冊尾にあります。また「文化丁卯」の印があることから、本書は文化四年（一八〇七、丁卯）、昌平坂学問所に収蔵されたことが分かります。

「浅草文庫」、「日本ノ政府ノ図書」の印が、每冊首にあります。

「内閣ノ文庫」の印が、每冊首・每冊尾にあります。

このことから明治維新後は、「浅草文庫」（明治七年～一四年）を経て、当館に所蔵されたことが分かります。「日本ノ政府ノ図書」の印は、明治一九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。「内閣ノ文庫」の印は、昭和八年から使用されています。

【刊行年代】

序文の末に「建安劉氏南ノ澗書堂重刊」の木記があることから、建安（福建省建甌市）の「南澗書堂」より刊行されたことが分かります。出版年時については不明です。

元刊（劉氏南澗書堂）…当館目録、三三頁。

元槧本…『経籍訪古志』、三三頁。

元建安劉氏刊本…『関東現存宋元版書目』、二三六頁。

元建安劉氏南澗書堂刊…『宋元版所在目録』、四四頁。

七冊 編著者未詳

吉田意庵・昌平坂学問所旧蔵「請求番号 別四八五」

『孟子集成』は、『四書集成』のうち『孟子』の部分のみが伝わったものです。『四書集成』は、『集成』とあるように、朱熹の『四書集註』(20『四書集註』を参照)に関する注釈を集めて一つにまとめあげたものです。この『四書集成』に採用された注釈書の類は以下の八種です。

朱子集註…「四書」に対する朱熹の注釈書、『四書集註』。

朱子集義…朱熹が『論語』『孟子』に関する先学の説を集めた書、『論孟集義』。

朱子語類…朱熹が門人達と交わした座談の筆記録、『四書或問』。

朱子或問…朱熹が『朱子集註』で、諸説を取捨し自説を確立した理由を説明した書。「或問(或ひと問う)」と問題提起しそれに答える形で説明をしている。

南軒張氏註…朱熹の同時代の学者である張栻の注釈書。著書に『癸巳論語解』『癸巳孟子解』等がある。

黄氏講義…黄幹(朱熹の弟子)の注釈書。

蔡氏集疏…蔡沈(朱熹の弟子)の子である蔡模の注釈書。著書に『論語集疏』『孟子集疏』がある。

趙氏纂疏…南宋時代の学者である趙順孫の『四書纂疏』。

編著者は、呉真子とする説もありますが、本書には編著者の記載はありません。

【伝来】

「吉家氏蔵」(あるいは「吉氏家蔵」)の印(白文)が、第一冊目の冊首

にあります。この印は朱で塗り潰されていますが、「吉家氏蔵」の印文がなんとか読み取れます。本書は、吉田意庵(前掲18『論語通』を参照)の旧蔵書と考えられます。

「昌平坂/学問所」(墨)の印が、每表紙・每冊尾にあります。また「文化甲子」の印があることから、本書は文化元年(一八〇四、甲子)、昌平坂学問所に収蔵されたことが分かります。

「大学校/図書之印」、「浅草文庫」の印が、每冊首にあります。「日本/政府/図書」の印が、每冊首・每冊尾にあります。

このことから明治維新後は、文部省の前身である「大学校」(明治二年(四年)に収蔵され、その後「浅草文庫」(明治七年(一四年)を経て、当館に所蔵されたことが分かります。「日本/政府/図書」の印は、明治九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

【刊行年代】

元刊：当館目録、三三頁。

元刊本：「関東現存宋元版書目」、一三六頁。

元刊：「宋元版所在目録」、四五頁。

20 「四書集註」 一六巻

一四冊 (宋) 朱熹 撰

林(大学頭)家旧蔵「請求番号 別六三二」

『四書集註』は、南宋時代の大学者である朱熹が著した『大学章句』『中庸章句』『論語集註』『孟子集註』の総称で、朱熹の学問の精髓ともいえるものです。「四書」とは、『大学』『中庸』『論語』『孟子』の四つの書をい

い、「大学」と「中庸」はもと「礼記」の一篇、『論語』は孔子の言行録、『孟子』は戦国時代の思想家である孟軻の言行録です。この「四書」の重視は、北宋時代の学者である程頤（一〇三三～一一〇七）に始まります。朱熹は、この程頤の考えを継承して広く先人の学説を集め、四八歳の時に著したのが『四書集註』です。この書は、その後も改訂を加えられ、その作業は朱熹が亡くなる直前まで続けられたといえます。

朱熹（一一三〇～一二〇〇）は、字は元晦、号は晦庵、朱子と尊称される南宋時代の大学者です。官吏登用試験（科擧）に合格して官僚の道歩みはじめましたが、李延平と出会って学問に志し、官僚を辞めて郷里で著述と門人への教育に専心しました。朱熹には膨大な著述がありますが、後世への影響を考えると『四書集註』が朱熹の代表作といえるでしょう。『四書集註』は、中国はもとより日本でも尊重され、江戸時代には基本的な学問書として広く読まれました。その影響は測り知れません。

【伝来】

「弘文学士院」（白文）の印が、第一冊目の冊首にあります。このことから本書が、林鷺峯の蔵書であったことが分かります。林鷺峯（一一八一～一六八〇）は、江戸時代前期の儒学者で、林羅山の三男、名は恕、別名は春勝、鷺峯は号です。明暦三年（一六五七）、父である林羅山の死去により林家を受け継ぎました。寛文三年（一六六三）、林鷺峯の功績が認められ、私塾である忍岡塾を弘文院と称するよう幕府より申し渡されました。以後、林鷺峯は「弘文学士」と称しています。

「林氏ノ蔵書」の印が、毎冊首にあります。

昌平坂学問所は寛政九年（一七九七）に開校し、林羅山以来収集された林家の蔵書が移管されました。その時に移管された蔵書に捺されたのが、この「林氏ノ蔵書」の印です。

「昌平坂ノ学問所」（墨）の印が、每表紙・毎冊尾にあります。年代印はありませんが、前述のように寛政九年に昌平坂学問所に移されたものです。「大学校ノ図書ノ之印」、「浅草文庫」の印が、毎冊首にあります。

「大日本ノ帝国ノ図書印」（乙種）の印が、每表紙裏面にあります。このことから明治維新後は、文部省の前身である「大学校」（明治二年（四年）に収蔵され、その後「浅草文庫」（明治七年～一四年）、「内務省図書局」（明治九年～一八年）を経て、当館に収蔵されたことが分かります。「大日本ノ帝国ノ図書印」（乙種）は「内務省図書局」の印で、明治九年十月十日に改刻したものです。

「逸心」（白文）の不明印が、『中庸章句』冊首にあります。

「逸楊鉦ノ章」の不明印が、『中庸章句』冊首にあります。「鴻山黄ノ氏子孫ノ永保用」の不明印が、『大学章句』、『中庸章句』、『論語集註』、『孟子集註』それぞれの冊首にあります。

【刊行年代】

元延祐刊（趙鳳儀）…当館目録、三三三頁。
元延祐五年温州路儒学稽古閣刊：「宋元版所在目録」、四二頁。
「延祐五年」は、中華民国国家図書館蔵本の刊記に基づく。

21 四書章句纂釈 二二卷 四書章句附括総要 三卷

昌平坂学問所旧蔵「請求番号 別四九 一一」

『四書章句纂釈』は、朱熹の『四書集註』（前掲20『四書集註』を参照）に、元時代の学者である程復心が注釈を加えたものです。程復心は、朱熹の文集や朱熹の門人達の学説を集めて折衷し、さらに章ごとに図を用いて

朱熹の学説を図解したものです。

程復心は、字は子見、婺源（江西省上饒市婺源县）出身の人。郷里において学問を修め、本書を編纂しました。本書は朝廷に献上され、その功績によって「徽州路儒学教授」の官職を特別に授与されました。

【伝来】

「柴氏家ノ蔵図書」の印が、毎冊首にあります。このことから本書が、柴野栗山の蔵書であったことが分かります。柴野栗山（一七三六―一八〇七）は、江戸時代後期の儒学者で、名は邦彦、栗山は号です。一八歳で江戸に出て林家に学び、三二歳で阿波藩の藩儒となりました。五三歳の時、幕府に招かれて江戸に赴き、図書の校訂・編集、昌平坂学問所の発足などに貢献しました。

「昌平坂ノ学問所」（墨）の印が、每表紙・每冊尾にあります。また「文化丙子」の印があることから、本書は文化一三年（一八一六、丙子）、昌平坂学問所に収蔵されたことが分かります。

「大学ノ蔵書」、「浅草文庫」の印が、毎冊首にあります。
「日本ノ政府ノ図書」の印が、毎冊首・每冊尾にあります。

このことから明治維新後は、文部省の前身である「大学校」（明治二年～四年）に収蔵され、その後「浅草文庫」（明治七年～一四年）を経て、当館に所蔵されたことが分かります。「日本ノ政府ノ図書」の印は、明治一十九年二月に「太政官文庫」が「内閣文庫」に改称された際に新刻されたもので、以後昭和七年まで使用しました。

【刊行年代】

「朝貴題贈序文」の後に「富沙碧湾呉氏ノ徳新書堂印行」の木記があり、また「大学章句」の末にも「至元歳次丁丑ノ菊節徳新堂印」の木記があります。このことから本書が、元時代の至元三年（一三三三、丁丑）の菊節

（陰暦の九月九日）に、建安（福建省建甌市）の「徳新書堂」より刊行されたことが分かります。

元後至元三刊（徳新堂）：当館目録、三五頁。

元の時代は「至元」の年号が二度あり、後の「至元」（一三三五―一三四〇）を「後至元」とします。

元槧本：『経籍訪古志』、三四頁。

元後至元三年富沙碧湾呉氏徳新書堂刊本：『関東現存宋元版書目』、一三三

六頁。

元後至元三年富沙碧湾呉氏徳新書堂刊：『宋元版所在目録』、四五頁。

（統括公文書専門官室研究員）